一四八　高忠の侍歌よむ事［宇治拾遺物語巻一二・一二］

今は昔、高忠（たかただ）といひける越前守の時に、いみじく不幸なりける侍の、夜昼まめなるが、冬なれど、帷（かたびら）[2]をなん着たりける。雪のいみじくふる日、この侍、きよめすとて、物のつきたるやうにふるふを見て、守歌よめ、をかしうふる雪かな」と申せば、「はだかなるよしをよめ」といふに、程もなくふるふ声をさゝげてよみあぐ。

はだかなる我身にかゝる白雪はうちふるへ[3]どもきえせざりけり

とよみければ、守、いみじくほめて、きたりける衣をぬぎてとらす。北方もあはれがりて、薄色の衣のいみじう香ばしきをとらせたりければ、二つながらとりて、かいわぐみて、脇にはさみて立ちさりぬ。侍に行きたれば、ゐなみたる侍どもみて、驚きあやしがりて問ひけるに、かくと聞きて、あさましがりけり。

さて、この侍、その後みえざりければ、あやしがりて、守尋ねさせければ、北山に貴き聖ありけり、そこへ行きて、此得たる衣を二つながらとらせて、云（い）ひけるやう、「年まかり老いぬ。身の不幸、年を追ひて増る。此生の事は益もなき身に候うめり。後生をだにいかでと覚えて、法師にまかりならむと思ひ侍れど、戒師に奉るべき物の候はねば、今に過ぐし候ひつるに、かく思ひがけぬ物を給りたれば、限なくうれしく思ひたまへて、是を布施に参らする也」[4]とて、「法師に成させ給へ」と、涙にむせ返りて、泣く泣く云ひければ、聖、いみじう貴みて、法師になしてけり。

さて、そこより行方もなくて失せにけり。ありどころしらずなりにけり。

一四九　貫之歌の事［同巻一二・一三］

今は昔、貫之が土佐守になりて、下りて有りける程に、任果ての年、七八斗（ばかり）の子の、えもいはずをかしげなるを、限なくかなしうしけるが、とかく煩ひて、うせにければ、泣きまどひて、病づく斗思ひこがるゝ程に、月ごろになりぬれば、かくてのみあるべき事かは、上りなんと思ふに、ちごのここにて、何とありしはやなど、思ひいでられて、いみじうかなしかりければ、柱に書きつけける

都へと思ふにつけて悲しきは帰らぬ人のあればなりけり

とかきつけたりける歌なん、いままでありける。

1　傍線は読解に役立つ重要語だから辞書で調べること。数字は単なる注釈ではなく読解で意識するポイント。駒沢大テキスト利用

2　かたびら＝裏地のない着物

3　震えると降るの掛詞

4　主語は文脈の常識から推定する。ここでは尊き僧の所へ行ったのは、歌を詠んだ侍。

土佐日記では都へと思ふをものの悲しきは帰らぬ人のあればなりけり